

自然の猛威に今回もなすすべ無し、台風十八号は無情にも河川を決壊させ一万余千棟が浸水した。この様な無情の事態に感傷し慟哭してしまう事がある。人生街道には明暗あり。人夫々に道を開いてきたであろうが壁にぶち当たった事が無いと言う、恵まれた人間がはたして何人いるであろうか、**緊急事態発生ともなれば信じる信じないは別にして、何かに救いの手を求めてきた事でしょう。**求めなければならぬ、弱い自分がそこにいたことに気が付くからかもしれない。常に否定していた方々でもイザ鎌倉ともなれば藁をも掴みたくなる、そんな思いに駆られることでしょう。そこから啓発する神仏崇拜でも良いではないか。**打開する一つの契機に信仰が生きるのであれば**それも良いことだと思います。山本空外博士は信ずるといふのは、心をして澄浄ならしめることとです。心が浄らかになつてくるのです」と、浄いといふことは濁りが無いといふことであり、私は真っ白な世界を指していると思つています。**白色は一点の濁りも見逃しません。即ち、小さな間違いも見逃さない事だと思ひます。**我々はすべからず浄土でいふところの「白道」を進んで行く事だと思ひます。鷹峰卍山和尚の法語に「古所謂中心為忠此言至矣。中心者信心也。信心者猶如大海之七早九潦不増不減。信之有常有如彼者。」とある。鏡島元隆師の訳によれば「古い言葉に中心を忠とする語があるが、この言葉は至極の道理を示している。**中心とは信心であり、信心とは**あたかも大海が日照りにも長雨にも増えもせず減りもしないというように変わらぬものであり、その恒常であることは大海の不増不減に比すべきものがある」と。当に信心は正しき道、一筋です。正しき道を行くにも落とし穴があります。**それは罪に陥れようとする三業（身・口・意）があるからです。**道世は「心口相調。心説口言。汝常説善莫説非法。口還説心。汝思正法莫思非法。心復語身。汝勤精進莫行懈怠。如是我心自制。我口自慎。我身自禁。如是我策足得高昇。何劣他控横起怨憎。」と、鏡島師訳「心と口は互いに誠めなければならぬ。心は口に説いて、汝は常に善を説き非法を説いてはならないと言ひ、口はまた心に説いて、汝は正法を思つて、非法を思つてはならないと言ひ。心はまた身に語つて、汝は勤めて精進し懈怠してはならないと言ひ。このように我が心を自ら制し、我が口を自ら慎み、我が身を自ら抑え、自分自ら策勵して高い境地に達すれば、何で他をけおとして怨憎を買う事に心を煩わすことがあろうか」と。言われてみれば、**要因は全て自我（六根）が手引きをするからです。この身で他を排斥し、口で罵倒し、心に怨念を抱く等々邪念妄想に因つて罪に罪を重ねることになつてしまふのです。**

入口があるから出口が必要になり、出口があるから入口が必要になります。生まれて死んで、死んで生まれて、良くてきています。花も枯れて根が残り、又芽を出し花が咲きます。佛の教えでは**機根**と言ひ修行していく力、能力を意味します。教では根に六根（眼・耳・鼻・舌・身・意）あるとし、遂行に不退転の力（五力）が必要です。**私は根が魂になり、人間も肉体は消滅しても魂が再び生命を起こし、人となるのではないかと思つています。**私はこれを往生と位置づけています。